■ 投 稿 論 文

主婦という違和感/主婦という制度

—現代中年女性のライフ・ストーリーから—

西 村 純 子

要 約

主婦とは、家事・育児などの家庭責任を負う女性を指す実態的カテゴリーであると同時に、女性を家事・育児の責任者とするような意味・モノ・行為の体系から成る制度である。中年女性のライフ・ストーリーの分析を通して明らかになったのは、主婦という制度は女性たちの違和感を内包しながら維持されており、彼女たちの違和感とは、主婦であり続けることの選択不可能性、「専業」主婦という立場の不安定性、身体化された家事の拘束力に対するものであること、そこには高度成長期以降の女性の就労をめぐる意味内容の変化や性別分業規範の流動化といった歴史的社会的状況がかかわっているということである。今日的な状況における主婦という制度をめぐる社会学的研究は、主婦をめぐる選択がどのような条件のもとで、どのように引き受けられているかに注目することによって、主婦という制度がいかに生成・変容しているかを記述していくことが必要である。

キーワード：主婦という制度、違和感、主婦をめぐる選択

Uneasiness of Housewife and Housewife as an Institution

—From the Analysis of Life-Story of Midlife Women in Contemporary Japan—

Junko Nishimura

Abstract

“Housewife” is not only an actual category which refers to a woman who has the responsibility of managing housework, but also to an institution constituted of systems of meaning, material structure, and practice which makes a woman take responsibility for housework. By analyzing the life-story of mid-life women, it is revealed that the institution of the housewife is undergoing a kind of “uneasiness” related to being a housewife, and that this uneasiness is directed toward the impossibility of being able to choose to be a housewife, instability of not having any job, and bonds of daily housework, which is influenced by social-historical context such as change of meaning of women’s participation to the labor force and value concerning gender division of labor during the period of after high-economic-growth. The sociological study concerning housewife as an institution in contemporary society must describe how the housewife as an institution is formed and changed by focusing on how the choice around being a housewife is undertaken considering the change of social condition and one’s social position.

Key words : Housewife as an institution, Uneasiness, Choice of being a housewife

Department of Sociology, Graduate School of Keio University

はじめに

主婦とは、家事・育児などの家庭運営の責任を負う女性である⁽¹⁾。しかし高度成長期以降、主婦とよばれる女性の生活の内実は多様化している。つまり教育終了後の女性の就業の一般化と既婚女性の労働市場への参入にあいまって、女性のライフコースは就業継続型、中断一再就業型、専業主婦型に大きく分かれるようになった。けれどもこのような主婦の多様化にもかかわらず、家事や子育ての負担は相変わらず女性の肩に重くかかっている⁽²⁾。つまり実態としての主婦（主婦とよばれる女性）が多様化する一方で、制度⁽³⁾としての主婦（女性が家事や子育ての責任者になっていくような意味・モノ・行為の体系）は強固に維持されている。本稿では主婦を、女性と家事・育児をむすびつける理念や意味の体系、社会の機会構造や社会保障などを含むモノの体系、そして「主婦」をめぐるライフコース選択や日常の性別分業の実践という行為の体系から成る制度としてとらえる。そしてそれが現代日本社会においていかに維持されているかを、女性の「主婦」をめぐる経験についての語りを分析することによって明らかにする。

制度としての主婦を成り立たしめているのは、上野千鶴子の議論を援用すれば、男性による女性の労働力の支配である（上野, 1990）⁽⁴⁾。近代産業社会において市場労働と家事労働の分割が生まれ、そこにおける家事労働という不払い労働の家長男性による領有こそが、女性を主婦たらしめている要因であると説明される。女性の再生産労働とその労働の成果である再生産物が男性によって領有されているような状況においては、育児（・家事）専従になりたい、なるべきだというイデオロギー的圧力が働き、そのようなイデオロギーを内面化した女性は、すすんで労働市場から去る、とされる。つまり上野の議論では、主婦的な生活に入っていく女性は、家父長制に都合のよいイデオロギーを内面化した存在として措定されてしまう。

このような議論は、「なにによって（why）」主婦という制度が成り立っているかを説明するけれども、それが「いかに（how）」維持されているかについては明らかにしない。男性による女性の労働力の支配が社会全般にわたっているという指摘そのものは重要である。しかしまた、主婦という制度がなぜかくも強固であるのかという問いに答えようとするならば、その制度が人々の日常生活のなかでいかに維持・再生産されているかという点に注目していく必要があるだろう。本稿では、制度としての主婦に注目し、それが高度成長期以降の時代を生きてきた女性のどのような経験によって支えられているのかを、女性の語りを通して明らかにすることによって、その制度がいかに維持されているかについて考察する。そのような作業をふまえて、今後の主婦という制度をめぐる社会学的な研究の方向性を明確化する。

1. 視点と方法

主婦という制度の現代的様相を明らかにするにあたって、本稿では主婦という制度がいかに生きられているかに注目する。そのために女性の経験についての語りを分析する。語られる主観的現実の分析を通して、社会が生成・再編されるプロセスに焦点をあてることが可能となる。このような方法が含意しているのは、人間を価値や規範を内面化するだけではなく、価値や規範を再解釈し、操作し、相互作用過程のなかで社会をつくりかえていく社会的行為者としてとらえるような人間観である。つまり社会とは、人間の生活世界における解釈や意味づけという日常の実践によって支えられ、個々の社会的場にお

いて日々生成されていると考えられる。このような視点は、上野の描くような主婦像—男性による女性の労働力の領有という構造から必然的に措定されるような、家父長制に都合のよいイデオロギーを内面化した存在としての主婦—を相対化しうるものでもある。

主婦という制度が維持されてきた背後にある女性の経験を把握するために、本稿ではインタビューによるライフ・ストーリー・データ⁽⁵⁾を用いる。ライフ・ストーリーとして語るという行為には、過去の出来事や体験を自らの解釈をふまえて語ることが含意されている⁽⁶⁾。本稿では「主婦」をめぐる女性のライフコース選択と日常の家事の実践に注目し、「違和感」を切り口に主婦という制度の現代的様相を考察する。第二波フェミニズム運動から起こった女性学がめざしてきたもののひとつは「女性の経験の顕在化」（井上, 1999, p.21）であり、主婦という違和感は女性の経験を構成する重要な要素であり続けてきた。事実、第二波フェミニズム運動の出発点は、ベティ・フリーダンが「得体の知れない悩み」（Friedan, 1963）と名づけた主婦という違和感だったのであり、それはこれまでの多くの主婦論が注目してきた点でもある⁽⁷⁾。つまり主婦という違和感には、「主婦」をめぐる歴史的社会的状況が集約されていると考えられる。

調査の対象となるのは、東京都およびその近郊に在住する 1997 年当時 40 歳代から 60 歳代前半の女性 12 人（40 歳代 3 人、50 歳代 7 人、60 歳代 2 人）である。この世代は、若年女性の雇用労働者化、既婚女性の主としてパートタイム雇用者としての再就業という高度成長期以降の女性の労働市場への参入のプロセスを、自らのライフステージに対応したかたちで経験してきた世代である⁽⁸⁾。つまり現在中年期にあたるこの世代は、中断—再就職という、現在では主流を占める女性のライフコース・パターンの形成・定着に寄与した世代である。また 1980 年代頃から活発になった「新しい」働き方を模索したワーカーズ・コレクティブ⁽⁹⁾や市民活動の主たる担い手もこの世代であり、彼女たちは主婦の多様化のプロセスを自らのライフコースと同時代的に経験してきた世代でもある。その意味で彼女たちの「主婦」をめぐる経験を把握することは、実態としての主婦の多様化が制度としての主婦を維持しながら進んできたプロセスそのものを可視化することであると考えられる。

調査対象者のうち、当時働いている人は 4 人（フルタイム 2 人、パートタイム 2 人）、働いていない人が 8 人である。働いていない女性のなかでは、一度も仕事をもったことのない女性は 1 人、他の女性は結婚や出産までは働いた経験をもつ。学歴は大学卒 6 人、短大卒 2 人、高校卒 4 人で比較的高学歴層である。調査対象者は、2 つのルートから得られた。ひとつは、都内 S 区のボランティア協会からの紹介、もうひとつは、首都圏内の中高年女性約 500 人が登録している、東京近郊の文化施設・史跡等を見学することを主たる活動としているサークルからの紹介である⁽¹⁰⁾。今回の調査対象者は、ボランティア活動やサークル活動への参加が可能な層であり、経済的に恵まれた層の女性であるといえる。「夫の」という限定性はあるものの、経済的な安定を得ているこの層は、主婦として生きるうえでも多様な選択肢を最も享受しうる層であると考えられる。つまり彼女たちは、実態としての主婦の多様化を体現しうる層であり、彼女たちの語りには高度成長期以降の「主婦」をめぐる経験の、ひとつの典型的な様相が見出されるのではないかと考えられる。次節では主婦という制度が女性のどのような経験に支えられているかについて、女性の語りを引用しながら記述を行う⁽¹¹⁾。

2. 分 析

(1) 「主婦」をめぐるライフコース選択と主婦という違和感

現代の既婚女性の多くのライフコース選択は、実質上「主婦であり続ける」ことを前提としており、どのような主婦であるかをめぐる選択であるといえる。それは就業についての選択と密接にかかわっている。

Yさん（49歳・子ども2人）は2人目の子どもの出産を期に外資系企業を退職し、インタビュー当時は区立図書館でのパートと、外国人に日本語を教えるボランティア活動を行なっている。これまでの夫との家事分担については、「やってもらえなければバンバン文句をゆって。それでもやってもらえないままきたんですけど、確実にむこうのほうがい忙いんだからね、しょうがないわねってかんじでした」と語る。彼女は退職時のことを次のように語る。

「2人目の子が産まれるときに、ちょっとやっぱりもうとても無理で、辞めました。1人目のときは保育園に入れて、がんばったんですけど。2人目のときどうしようかなと思ったんだけど、結構もうギスギスの顔になってたんで。それまではフルタイムでがんばってたんですけどね。……会社、仕事自体も楽しかったし、なかなかよかったんですけども」。

Yさんにとっての退職は、育児と仕事の両立が限界のところにきての決断であったようだ。退職という選択をする背景には、夫の協力も望むべくもない状況へのあきらめややりきりがあったであろうことは、夫との家事分担についての語りから示唆される。また子どもを預けて働くことも容易ではない状況が、第一子を出産する前に広告関係の仕事を退職したTさん（48歳・子ども2人・専業主婦）の語りからはうかがわれる。

「(仕事を) やりたい気持ちはあったけれどもできない状況で。時間的に不規則だったんですよ。当時はなかなか(子どもを) 預けるところもなかったし、個人的に預けて仕事をするとなると、自分の働いたお金は全部そっちに行っちゃうし」。

Yさん、Tさんの事例では、たとえ就業継続への志向があったとしても出産による退職という選択は、「主婦であり続ける」ための事実上それしかない選択としてとらえられている。現在中年期を生きる女性の人生は、女性のライフコースの多様化のなかで展開してきたものであった。しかしそれは「主婦であり続ける」ことを前提としたうえでの多様化であったといえる。この世代の育児期におけるライフコース選択をめぐる違和感とは、「主婦であり続ける」ための選択肢の限定性、そして「主婦であり続ける」ことの事実上の選択不可能性への違和感であるといえる。

この世代の女性は、結果的に最も専業主婦化し、その後就業以外のかたちでも地域社会で活発に活動した層である。そこには「専業」主婦という立場で地域社会で多様な活動を行うことによって、生活に根ざした主婦役割を積極的にとらえかえす層が出現したことはこれまでも指摘されている⁽¹²⁾。しかしそのような層においても、それらの活動が「専業」主婦という枠にとどまっているがゆえの違和感が存在しうることが、前出のYさん、そしてインタビュー当時仕事はもたず、地域で複数のサークル活動に参加しているMさん（50歳・子ども1人）の事例から読み取れる。彼女たちは就業していない状況を次のように語る。

「稼ぎはないけれどゆとりがあるし、地域の町内会なんかの社会の下支えを担ってるんだっていう思

いはすごくあります。でも私は主婦ですって胸張って言う雰囲気でもないですよ。ちょっと微妙なんですけどね」(Yさん)⁽¹³⁾。

「自分のやりたいこともやらせてもらってるんだけど、やりがいつていうのが難しいですよ。仕事もってる人だったらそこで出てきますけど、なにもしてないと、外に現れないっていうか、認めてもらえないような」(Mさん)。

彼女たちは一方で就業していないことから得られる時間的ゆとりや地域社会での活動を積極的に評価しながら、「専業主婦」という立場の不安定性を表明する。このことを理解するためには、彼女たちが生きてきた時代背景を考慮する必要がある。この世代は、第二次オイルショック後の経済低成長の時代に、多くは専業主婦として子育て期をすごした。それは高度成長を支えてきたサラリーマンの働き方が社会問題化し、斎藤茂男の『妻たちの思秋期』(1982)に代表されるような専業主婦の抱える問題性が社会的に広く認識されるようになった時代でもあった。「思秋期」の背景には、主婦役割に同一化してきた/せざるをえなかった専業主婦の状況があることが指摘された。その一方で「キャリア・ウーマン」や「女の時代」が流行語となり、マス・メディアによって女性の就業が生活のためだけでなく、自己実現の手段として語られるような言説空間が形成された。そのような時代を背景に、この世代の女性は主婦役割に過度に同一化することなく「主婦らしくない主婦」を志向し、またそれを実現しうる最初の世代であったといえる。女性の生き方はたしかに自由になったかのようなものである。しかし事例からはそのような時代の雰囲気や、専業主婦として生きる女性たちに抑圧的にはたらいっていることも示唆されている。主婦は働いている/いないや、フルタイム/パートタイムで序列化され、仕事をもたない女性には家庭の外へと追い立てられるような焦燥感が生じている。このような専業主婦の違和感はすでに80年代半ばには指摘されていたが⁽¹⁴⁾、90年代終わりにもその状況は変わっていない。つまり現代日本社会においては、あらゆる女性のライフスタイルが等価なものとはされておらず、女性が自らの志向性に合わせた多様な生き方が可能になっているわけではない。

女性の職場進出が称揚されるような言説空間を生きるとき、子育てから得られる喜び(生活実感)は微妙な位置づけを与えられる。それは就業することとの比較対象となる。Sさん(55歳・子ども3人)は仕事をもった経験はない。インタビュー当時は区民講座の企画委員や高齢者昼食会の世話人など、地域のボランティア活動の中心的役割を担っている。彼女は自らのライフコース選択を次のように語る。

「子どもって次から次へといろんなことやってくれるんです。そのことがとても楽しかったもんですから、仕事をしようっていう気にもあまりならなかった、というのがひとつですよ。それと、この子たちをおいていくだけの価値のある仕事のほかにあるのかわかっていうのもあったんですよ。多分、私ぐらの歳でしたら、ほんとにひと握りの人だけがどどんいけるっていう感じの時代ですよ。それだったら子どもをおいていくだけの価値のあることって世の中にそんなにあるかわかっていう気がするくらい楽しかったんです」。

Sさんは就業しなかったことの理由に、子育ての喜びをあげる。機会構造の制約性のなか、子育ての喜びは就業することに比較して余りあるものとして語られる。しかし就業する/しないと主婦役割の遂行による「生活実感」の有無は、相互に独立したカテゴリーになりうるものである。就業と子育てが両立しえない(少なくとも両立させることが困難な)機会構造の制約性が、就業することと子育てから得

られる「生活実感」をトレード・オフの関係で語るような言説空間をつくっていると考えられる。

(2) 身についた主婦性

主婦という制度はまた、日々の身体化された実践によっても支えられている制度である。以下の事例からは、日々の実践の積み重ねのなかで身体化された「主婦性」によって、「主婦でありつづける」ような行為とそれを可能にする条件とが再生産される「構造」が見出される。

Kさん(52歳)は大学卒業後、大学の研究室で副手として働き、第一子が産まれる直前に退職した。その後次々と出産し5人の子どもを育てた。インタビュー当時は仕事はもたず、ボランティアとして障害者のリハビリと高齢者の通院の送迎をしている。当時夫は単身赴任中であり、子どもたちとの家事分担について、次のように語る。

「分担したらいいなと思うことはよくあります。せいぜい自分の部屋ぐらいは掃除して欲しいとか、洗面所とかトイレとか、そのときに気がついた人がすればいいんじゃないかしらとかそういう思いはあるけど、なかなか。言うよりやっちゃったほうが早いかなっていう、なんかごちゃごちゃ言われながらやるよりは、自分がやれるんだったらやっちゃったほうがいいかしらと思っちゃうもんで」。

またAさん(43歳・子ども2人・専業主婦)は日々の生活について以下のように語る。

「何でも自分でできる範囲ぐらいはやってほしいっていうのはあるんです。でもつつい手をかけすぎるところがあって。まず頭になにがあるかっていったら、家のことをやって、子どもと旦那さんに支障がないようにやってって、まず考えてから行動してしまうんです」。

Kさんの事例では、家事を子どもと分担したいという気持ちをもちながらも、実際にはKさんが家事の遂行者であり続けていることが示されている。おそらくは家族メンバーのなかでいちばん家事能力が高いであろうKさんは、日常性のなかでの効率や他のメンバーに働きかけることの煩わしさのために、「自発的」に家事の主たる遂行者となっているといえる。つまり日々の実践が女性を家事能力に最も秀でた地位に据え、そして女性が最も家事能力をもつがゆえに主たる遂行者となるという循環的なメカニズムが働いている。このような日常の実践のなかで「身についた主婦性」(金井, 1997, p.59)は、Aさんの事例に示されているように、他者への配慮という思考・行動様式とも分かちがたく結びついている。女性にとって家事労働は「世話する者の感覚に世話される側の身体感覚を編みこんでゆく力を内在させる」ために「それに携わる者に独特の心理的包絡をもたらし、そこから解放されてありえるはずのときでさえ女性をその役割に縛りつけ、自由にさせない」(春日, 1994, pp.71-72)ものとして経験されている。主婦をめぐるもうひとつの違和感とは、このような身体化された家事の拘束力への違和感なのである。

3. 考 察

中年女性のライフ・ストーリーの分析から見出された違和感とは、「主婦であり続ける」ことを選択不可能性、「専業」主婦という立場の不安定性、身体化された家事の拘束力、への違和感であった。それは主婦という制度の揺らぎを示す。しかし同時にそれは、違和感という揺らぎを内包しながら、なおかつ女性の「主婦であり続ける」選択や実践を動員し、再生産しているというような意味での「固い」

制度である。

冒頭でふれたように、制度が意味・モノ・行為の3つの体系の総合体であるとするならば、主婦という違和感は、それら3つの体系のずれを示していると考えられる。とりわけ本稿で対象となった中年女性における主婦という違和感は、高度成長期以降の日本社会の機会構造の制約性と、言説空間で流通している女性の就業をめぐる意味内容とのずれから立ち現れる。高度成長期以降の女性の「職場進出」の内実、製造業への中老年女性のパートタイマーとしての（再）参入、第三次産業での中老年女性パートの増大とその賃金の相対的低下を伴ったものであった（大沢, 1993, p.170）。にもかかわらず女性の「職場進出」が称揚され、女性の就業が即「自己実現」や「やりがい」と結びつけられるような言説空間が形成された。そのような状況において、働いている/いないや、働いていてもフルタイム/パートタイムで女性が序列化されるような事態が起こったことは、現代中年女性的主婦という違和感のひとつの背景をなす。また家事とは女性だけの仕事ではないという理念と、日常の実践の積み重ねのなかで主婦役割が身体化されていることのずれに向けられる反省的なまなざしとしての違和感も、性別分業規範が一定程度流動化した状況における主婦という違和感の現代の特徴であろう。

以上を鑑みたとき、上野が論じたような、「主婦的」な生活に入っていく女性を、家父長制的なイデオロギーを内面化しただけの存在としてとらえることには疑問を差し挟まざるをえない。このような主婦像からは「主婦」をめぐる女性の経験の多くが捨象されてしまう。

しかしそれだけでなく、主婦という違和感は主婦という制度がいかに維持・変容されているのかを把握する重要な手がかりとなる。主婦という制度は、意味・モノ・行為の体系が再帰的にかわりながら日々生成されているようなものであると考えられる。主婦という違和感とは、主婦という制度を成り立たしめている3つの体系のずれとして位置づけなおすことが可能である。主婦という違和感が、意味・モノ・行為の体系にどのようなずれが生じていることを示すのか、そしてそのずれのもとで新たに主婦をめぐるどのような実践が生成されているのかを記述することによって、制度が生成・変容される局面をとらえることができると考えられる⁽¹⁵⁾。つまり今後の主婦という制度をめぐる社会学的研究は、主婦という違和感とその人のおかれた社会的位置や時代状況によって、どのように語られるか（あるいは語られないか）に注目し、そのような言説空間において主婦をめぐるどのような実践が生成されているのかを記述していく必要がある。

主婦という違和感についてはとくに、主婦をめぐる選択がどのように語られるかに注目することが肝要であろう。本稿の事例においては出産のために「専業」主婦になるという選択は、「主婦であり続ける」ことの選択不可能性への違和感を伴うものとして語られていた。しかし今後の「専業」主婦という選択は、後期近代社会におけるライフスタイルの選択性の増大⁽¹⁶⁾を、より反映したものとなりうる。そこには成熟社会化の帰結としての価値観の多様化⁽¹⁷⁾という社会状況の基本的な変化がかかわってくる。社会が全般的な豊かさを獲得したこと⁽¹⁸⁾、そして第二波フェミニズム運動を経過するなかで主婦をめぐる大量の言説が流通したことによって、主婦をめぐる意味や価値も、いくつかの軸から個々人が選んでいくような状況が想定される。主婦になること/ならないことも選択の俎上にのせられうるし、どのような主婦であるかも個々人の志向にそった選択によるものとなりうる。しかし選択という文脈を強調することによって、選択肢の不平等性を隠蔽し、選択の責任を主体に還元してしまうような社会の

ジェンダー構造には注意を向ける必要がある。「自分で選んだのだから自分の選択には責任をもつべきだ」という論理によって、主婦役割を担うことが逃れられないものとして構築されてしまう状況も想定される。注目されるべきは、主婦をめぐる選択がどのような条件のもとで、どのように引き受けられているかという点である。

あるいは知識としてのフェミニズムが一般化した今日的な状況が、主婦をめぐる選択にどのように関わっているかということにも注目する必要がある。たとえば、フェミニズムが提起する問題のひとつに、性別分業の撤廃がある。フェミニズムが目指すところの性別役割分業の撤廃は「さまざまな制度と制度連関が、事実上一つのライフ・スタイルを個人に強要しているような現状を変革し、個人がより自由にライフ・スタイルを決定できるような制度（と制度連関）を形成すること」（江原, 1995, p.3）を意図していると考えられる。にもかかわらず、言説空間においてその戦略的目標としての女性の就労促進のみが強調され、流通するような事態は、「専業」主婦という選択をした女性に自らのライフコース選択についての迷いを生じさせる、「ゆがみ」のような現象を引き起こしうるのは、「専業」主婦の立場の不安定性に関する本稿の事例からも示唆されている。フリーダンは『The Feminine Mystique』（1963）において、「得体の知れない悩み」の背景に、言説空間で流通する「女らしさを賛美する風潮」と女性の生きるリアリティとのずれがあることを描き出した。そこでは「女らしさを賛美する風潮」が、フロイトやマーガレット・ミードの学説を利用することによって強化されたことが指摘されている。フリーダンは批判したのは、専門家の言説が言説空間において、「女らしさを賛美する風潮」を支持するように利用されたことであり、そのような利用のされ方を可能にした言説空間の権力性である。知識としてのフェミニズムが一般化し、ギデنزが指摘するような、専門家の言説が、その言説が言及する活動と絶えず相互連関している再帰的状况（Giddens, 1990）においては、言説空間のなかでフェミニズムの言説がどのように用いられ、主婦をめぐる選択にどのように関わっているかということにも注目されねばならない。

また本稿の事例から、家事や子育てがもつケアという行為は、その身体的拘束力によって主婦という制度を維持・再生産するひとつの要因となっていることが見出される。それと同時にケアという行為から得られる「やりがい/喜び」は、言説空間において就業することとの比較対象とされるような「ゆがんだ」位置を与えられていることも示唆されている。主婦という制度がいかに維持されているかを考察するとき、ケアという行為に内在する拘束力を記述すると同時に、ケアという行為から得られる「生活実感」が言説空間においてどのように利用されているかを記述していくことが必要である。家事の「やりがい」や子育ての「喜び」にまつわる言説は、女性と家事・子育てとを結びつけるようなイデオロギック的作用をもつこともありうる。しかし家事をすることを通して自らのライフスタイルをつくりあげているという感覚、子育て経験のなかで自分自身が変化している感覚といった「生活実感」そのものは、イデオロギーとして切り捨てることのできない要素を含んでいる。たとえば服部良子は、家事には「関係性」や「自己充足」の要素もあるとして、次のように論じる。「誰かのためにしたい家事労働、自分の喜びのためにする家事労働は単に犠牲や自己満足と片づけるわけにはいかない。そこに他者と生きる意味や自分のアイデンティティが存在するからである。……健康や安全、楽しみや幸せに至るまで自らの「生活」を構想しその達成を目指すとき、家事労働はその一つひとつは食事を作ったり掃除をしたり

という決まりきった動作にすぎなくても、ときを重ねるなかで確実に生活を形作っていく」(服部, 1998, p.111)」。また家事や子育てに含まれるケアという行為そのものには、近代産業社会における価値観を根本から相対化しようような要素が含まれている。ケアという行為にはあらかじめ定められた目標や達成すべきノルマはない。先の目標のために現在を犠牲にするようなやり方ではなく、具体的な他者とのそのときそのときの関係性のなかに「喜び」や「やりがい」を見出していくようなやり方には、近代産業社会における人間の生き方のスタンスを根本からつくりかえる要素が内包されていると考えられる。主婦をめぐる社会学的研究に必要とされているのは、そのようなケアという行為から生じる実感が言説空間においてどのように利用されているかを記述し、生活実感を表明することにイデオロギー性を帯びさせるような言説空間の権力作用を徹底的に相対化していくことであろう。

おわりに

かつての第三次主婦論争の口火をきった武田京子は、生活と生産の二項対立図式を立て、主婦を百パーセントの生活人間として位置づけ、主婦こそが豊かさと余暇にみちた脱工業化社会を先取りして生きる人間であると主張した(武田, 1972)。この議論は生産至上主義を批判的にとらえるという重要な論点を含んでいたものの、「主婦」と「働く者」を対立的にとらえる図式を問題化することができず、生活と生産の関係性のゆがみそのものが問われることはなかった。そして生活と生産の二項対立図式は、本稿の事例にも見出される。就業(=生産)と「生活実感」(=生活)とを対立するものとして語らせるような状況がある。しかし生活と生産は、相互に排他的なカテゴリーではない。今あらためて問題にしなければならないのは、就業していない理由に「生活実感」を引き合いに出させるような言説空間をつくりだしている、主婦という制度であり、主婦をめぐる社会学的研究の課題は、本稿でその一端を試みたように、その制度が個々の社会的場においてどのように維持・変容されているのかを記述していくことである。

制度とは「成文化され合意された規則の中に場をもっているのではなく、あるいは行為者に明白に自覚された意識やパーソナリティの深層にその場をもっているのではなく、社会成員が日常的に自己と他の社会成員との行為や発話を扱うその方法の中にその場をもつて」(江原, 1995, p.88) いる。つまり制度の根底をなす意味の体系とは、あらかじめ設定されているのではなく、人々の日常の行為のなかで絶えず生成され、つくりかえられているようなものである。主婦という制度をめぐる社会学的記述は、それを絶えず構築し、維持している社会的実践としての日常の言説空間がどのように構成されているかということ、つまり言説空間の政治性に焦点を当てなければならない。

成熟社会化の帰結としての価値の多様化のなかで、たとえば「専業」主婦という選択は、ライフコースの選択肢としては残りうる。注目すべきは、社会的諸条件の変化、あるいは個々人のおかれている社会的位置によって、その選択がどのように引き受けられているか、つまり主婦をめぐる選択を引き受けしていくときにどのような言説が用いられ、主婦という制度が維持されているのかという点である。言説行為が絶えざる選択であり、実践であると考えれば、主婦をめぐる選択が語られるとき、どのような言説が選択されるのかという、主婦についての二重の選択の様相を記述していくことが、主婦をめぐる社会学的研究の今日的な課題である。

注

- (1) 主婦の定義に家庭運営の「責任者」であることを強調するものに、Lopata (1971)、Oakley (1974) がある。主婦の定義に夫への経済的依存を強調するものもあるが（たとえば瀬地山, 1996）、本稿では、より包括的な定義として前者の定義にしたがって議論をすすめる。
- (2) 家事時間（子どもの世話を含む）の時系列変化をみると、1970 年から 1995 年にかけて、女性の家事時間は減少傾向にあり、逆に男性の家事時間は増加の傾向にある。しかし 1995 年において女性の平日の家事時間は 4 時間 29 分、男性では 36 分と依然大きな差がある（三矢・吉田, 1997, p.166）。また、「家庭のこまごまとした管理は、女性でなくては、と思う」については男女とも半数以上が「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答しており、女性には家庭管理の責任者であることが求められている傾向が読み取れる（東京都生活文化局女性青少年部女性計画課, 1998, p.18）。
- (3) 盛山和夫によると、制度とは第一義的には理念的な存在であり、意味および意味づけの体系である。しかし意味だけが制度を構成するのではなく、制度とは行為の体系、モノの体系を加えた三つの異なるレベルの体系の総合体である（盛山, 1995, pp.221-236）。本稿では、この定義を制度としての主婦をとらえる出発点として位置づけ、議論をすすめる。
- (4) 上野の議論は、二元論的なマルクス主義フェミニズムの立場に立つて展開されたものであり、性による支配を形成する家父長制には、独自の物質的基礎があるというのが、その基本的なテーゼである。
- (5) 本稿で用いるライフ・ストーリーとは「一人称の形式で書かれた記録であり、対象者の人生（の一部）を本人の口述や筆記をもとに調査者が再構成した作品」（有末, 1992, p.265）とし、対象者自身の語りを公的な資料等で補足した作品であるライフ・ヒストリーとは区別して扱う。
- (6) しかし語られる「経験」とは何重もの意味で相対的なものである。まず語られる「経験」とは他者向けのバージョンであり、自分にとってより「真実」と思われるバージョンは語られず「とっておかれる」可能性を常に伴うということ、またインタビュー状況において語られる「経験」とは、他者向けのバージョンのなかでも、調査者（筆者）という特定の他者に向けられたものであることが挙げられる。さらに「経験」とは常に解釈しなおされる可能性を内包している。インタビュー状況において提示される「経験」は、ある特定時点においての「経験」であるという意味で、常に相対的なものである。ライフ・ストーリー・データはこのような意味での限定性を帯びたデータであるが、筆者はインタビュー状況において経験がそのように語られたということを重視したい。たとえ別のストーリーが「とっておかれて」いたとしても、インタビューの場で提示された「経験」は、女性の体験への意味づけの積極的な表明であると考えられるからである。さらにそのように語られるということ自体が、個人と社会との相互作用の産物であり、まさに社会が生成されるプロセスそのものであると考えられる。
- (7) Gavron (1966)、Oakley (1974) など。
- (8) 詳しくは岩井 (1990) を参照。
- (9) 日本で初めてのワーカーズ・コレクティブ「にんじん」が設立されたのは、1982 年である（佐藤, 1996, p.84）。
- (10) インタビューは、1997 年 6 月から 9 月にかけて行った。一人あたりのインタビュー時間は 1〜3

時間、場所は東京都S区のボランティア・センター内、対象者の自宅、喫茶店など、対象者の都合のよい場所を指定してもらった。対象者には、子育ての経験や職業経歴を振り返って感じていることなど生活全般について話してほしい、というインタビューの目的を告げ、調査者（筆者）が用意した質問について、ある程度自由に語ってもらうかたちをとった。質問は、子育て/夫婦関係/職業経歴/家庭外での活動、の領域に大きく分けられ、それぞれについて事実的事柄とともに、対象者がそれをどのように感じているかという「解釈」について聞くよう努めた。

(11) 事例の記述にあたっては、女性の語りを忠実に再現することに努めたが、紙幅の都合上、若干の編集を加えてある。

(12) 天野（1988）、国広（1993）など。

(13) 区立図書館でパートの仕事をしているYさんは、厳密に言えば就業している。しかしYさん自身の準拠集団は「専業」主婦であることがうかがえる。ここからも女性の就業について「フルタイム」「キャリア」というイメージが先行している状況が示唆される。

(14) たとえば、池田（1984）。

(15) 「違和感」は制度の変革要因としてとらえることも可能であるかもしれない。たとえばブルデューの「社会的再生産としての婚姻戦略」（1976）では、家産保全のための婚姻戦略と自らの感情に齟齬をきたす若者が、婚姻戦略に適合的な結婚をし、結果的には荒れすさみ子どもを残さず死んでいった例が紹介されている。この事例から宮島喬は、戦略適合的なハビトゥスに親和的でない感情や欲望を、システムを内側から腐食し、震撼させる、変動の内生要因として読み込んでいる（宮島，1994，p.147）。しかし主婦という制度は、「違和感」を内包しながらなおかつ強固に維持されていると考えられ、「違和感」がいかにして制度の変革要因となりうるかに関しては、さらなる検討が必要である。

(16) ギデنزの後期近代社会においては、人はライフスタイルを選択せざるをえない（“we have no choice but to choose”）状況におかれると論じる。そしてそのようなライフスタイルの選択性の増大を促す要因として、以下の点を挙げる。すなわち、ポスト伝統的秩序のなかで生活していることに由来する、現実世界から提供される選択肢の増大、生活世界の多元化・分節化、再帰性の増大による知識の絶えざる問い直し、メディアの発達による情報量の増大、純粋な関係性を求めるような親密性の変容によって、パートナーが多様な可能性のなかから選択されるようになったことである（Giddens, 1991, pp.82-88）。

(17) このことは近年の階層研究の成果から読み取ることができる。たとえば今田高俊は、生活様式における指向に関して、社会経済的地位を重視する達成的地位指向とは独立の地位次元として、人間関係での評価を重視するような関係的地位指向を析出している（今田，1998，p.37）。また盛山和夫は、人々にとって意味あるハイアラキー軸が、個人間でも異なり、個人内でも複数個存在することを指摘している。そのような階層の意味上の多元化を盛山は、基礎財における上方向平準化の一つの帰結として位置づける。すなわち、上級財は選好が多様化するために一元的尺度を構成しないのである（盛山，1999，p.19）。

(18) しかしこのことは必ずしも、高度経済成長の終焉によって如実になった女性の階層分化すなわち、働く必要のない専業主婦層と、働かざるをえないパート層の分化等について問う必要がないことを意

味しているわけではない。社会経済的変数が主婦をめぐる選択にどのようにかかわるかは重要な社会学的テーマであり続けるだろうが、主婦をめぐる選択について、社会経済的変数だけではとらえきれない次元の出現可能性にも着目するべきだろう。

参考文献

- 天野正子, 1988, 「台所から世界が見える一組合員の意識と生活の変容過程を中心に」, 佐藤慶幸編, 『女性たちの生活ネットワークー生活クラブに集う人びと』, 文真堂, 214-302.
- 有末賢, 1992, 「質的社会学としての生活史研究」, 慶應義塾大学法学会編, 『法學研究』 65 (1), 259-285.
- Bourdieu, P., 1976, "Marriage strategies as strategies of social reproduction", in Forster, R., and Ranum, O. (eds.), translated by Forster, E. and Ranum, P. M., *Family and Society : Selections from the Annales*, The Johns Hopkins University Press.
- 江原由美子, 1995, 『装置としての性支配』, 勁草書房.
- Freidan, B., 1963, *The Feminine Mystique*, Norton. (三浦富美子訳, 1977, 『増補新しい女性の創造』, 大和書房).
- Gavron, H., 1966, *The Captive Wife: Conflict of Housebound Mothers*, Routledge & Kegan Paul. (尾上孝子訳, 1970, 『妻は囚われているか』, 岩波書店).
- Giddens, A., 1990, *The Consequence of Modernity*, Polity Press. (松尾精文・小幡正敏訳, 1993, 『近代とはいかなる時代か?ーモダニティの帰結』, 而立書房).
- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity*, Polity Press.
- 服部良子, 1998, 「見えない労働からアンペイド・ワークとしての位置づけへ」, 『AERA Mook 生活科学がわかる』, 朝日新聞社, 107-111.
- 池田由子, 1984, 『妻が危ないー主婦の精神衛生相談』, 弘文堂.
- 今田高俊, 1998, 「社会階層の新次元ーポスト物質社会における地位変数」, 日本社会学会編, 『社会学評論』 49 (4), 31-49.
- 井上輝子, 1999, 「女性学のセカンドステージとジェンダー研究ー女性学の再構築に向けて」, 女性学研究会編, 『女性学の再構築女性学研究第 5 号』, 20-30.
- 岩井八郎, 1990, 「高度成長期以後の学歴とライフコース」, 日本教育社会学会編, 『教育社会学研究』 46, 71-95.
- 金井淑子, 1997, 『女性学の挑戦ー一家父長制・ジェンダー・身体性へ』, 明石書店.
- 春日キスヨ, 1994, 『家族の条件ー豊かさのなかの孤独』, 岩波書店.
- 国広陽子, 1993, 「都市の生活世界と女性の主婦意識」, 矢澤澄子編, 『都市と女性の社会学ー性役割の揺らぎを超えて』, サイエンス社, 69-106.
- Lopata, H. Z., 1971, *Occupation : Housewife*, Oxford University Press.
- 三矢恵子・吉田理恵, 1997, 「生活時間の時系列変化ー1970 年~1995 年の国民生活時間調査の時系列分析」, 日本放送協会放送文化調査研究所編, 『平成 9 年版 NHK 放送文化調査研究年報』 42, 155-193.

宮島喬, 1994, 『文化的再生産の社会学—ブルデュー理論からの展開』, 藤原書店.

Oakley, A., 1974, *The Sociology of Housework*, Martin Robertson & Company. (佐藤和枝・渡辺潤訳, 1980, 『家事の社会学』, 松籟社).

大沢真理, 1993, 『企業中心社会を超えて—現代日本を〈ジェンダー〉で読む』, 時事通信社.

斎藤茂男, 1982, 『妻たちの思秋期』, 共同通信社.

佐藤慶幸, 1996, 『女性と協同組合の社会学—生活クラブからのメッセージ』, 文真堂.

瀬地山角, 1996, 『東アジアの家父長制—ジェンダーの比較社会学—』, 勁草書房.

盛山和夫, 1995, 『制度論の構図』, 創文社.

盛山和夫, 1999, 「近代の階層システムとその変容」, 日本社会学会編, 『社会学評論』50 (2), 3-23.

武田京子, 1972, 「主婦こそ解放された人間像」, 再録: 上野千鶴子編, 1982, 『主婦論争を読むII』, 勁草書房, 134-149.

東京都生活文化局女性青少年部女性計画課編, 1998, 『東京女性白書 '98』, 東京都生活文化局女性青少年部女性計画課.

上野千鶴子, 1990, 『家父長制と資本制』, 岩波書店.

(にしむら じゅんこ・慶應義塾大学)